

## 岩手大学公開講座「音楽づくり～宮澤賢治の詩と音楽～」

島崎 篤子\*・今関 由紀子\*

(2002年3月12日受理)

Atsuko SHIMAZAKI・Yukiko IMAZEKI

Iwate University Extension Course

“Creative Music Making ~Poetry and Music of Kenji MIYAZAWA~”

## はじめに

平成5年からスタートした岩手大学教育学部の公開講座「石川啄木の世界」は、宮澤賢治生誕100年に当たる平成8年の第4回からは賢治の世界をも対象に加えながら、平成13年には第9回を迎えた。本講座には教育学部の様々な分野の教官が講師として参加している。音楽教育講座からは、第1回から一貫して今関由紀子が音楽部門に関する講師を担当してきた。また同講座の中地雅之も主にピアノ演奏を担当していた。中地は平成10年に他大学に転任した後も平成12年の第8回までは協力者として参加していたが、平成13年からは中地に代わって島崎篤子が本講座に参加している。

平成13年の第9回の音楽講座<sup>1)</sup>では、宮澤賢治の詩を取り上げて受講者による音楽づくりの活動を試みた。音楽づくりの活動は、平成元年版小・中学校学習指導要領(音楽編)によって導入されて以来、学校教育の現場では次第に定着してきており、また音楽教師対象のワークショップなども盛んに行われてきているが、一般の大人を対象として音楽づくりを実施した例はこれまで見られない。つまり本講座で行った音楽づくりは、一般人対象の本邦初の試みであった。

今後も本講座において同種の活動が行われることになるであろうが、平成13年度の公開講座におけるこの初の試みを書き留めておくのも歴史的な意味があるかと思われる。また岩手大学の公開講座「石川啄木の世界」は今後も継続する予定のようであるが、時あたかも平成14年度には本講座の10周年を迎える。この時期に、これまでの音楽講座を振り返ることも、今後の音楽講座の内容を検討する上で必要なことと思われる。

したがって本稿では、公開講座「石川啄木の世界」におけるこれまでの音楽講座の取り組みを振り返る一方、第9回における宮澤賢治の詩を対象にした受講生による音楽づくりの試みについて述べるとともに音楽講座における今後の課題を明確にしたい。

---

\*岩手大学教育学部

## I 公開講座「石川啄木の世界」における音楽講座

### 1. 第1回から第8回までの音楽講座

公開講座「石川啄木の世界」の第1回から第8回までの音楽講座の題目は、第1回「啄木の歌曲」、第2～3回「啄木～音楽と朗読」、第4～7回「音楽と朗読～賢治と啄木」、第8回「音楽と朗読～『雲は天才である』『注文の多い料理店』を中心として」である。

今関と中地が担当した平成12年度第8回までの音楽講座の概要を振り返ってみたい。

第1回（平成5年度）の音楽講座では、啄木の歌曲を取り上げた。土岐哀果によって指摘された谷村新司の「昴」と啄木の「悲しき玩具」（冒頭の2首）の歌詞の類似性に関する講話を行ってから、楽曲解説を加えながら啄木の歌4曲（「別れ」「校友歌」「渋谷小学校校歌」「春まだ浅く」）を受講生と共に歌った。さらに啄木の詩による複数の作曲者による歌曲の比較演奏を行った。例えば、「ふるさとの」は平井康三郎、清瀬保二、林芳輝の3氏、「やはらかに」は平井康三郎、清瀬保二、高田三郎、越谷達之介の4氏などである。なお啄木と関連させて歌曲演奏の合間に挿入したピアノによる砂の表現の比較演奏は、既成楽器による情景描写を目的とした音楽づくりの手法の一つに当たるものである。

第2回（平成6年度）は、本講座全体の企画責任者である望月善次教授が音楽講座に加わり、前半に啄木についての講話を行った。後半は音楽講座担当の二人が朗読と歌をほぼ交互に配して表現と演奏を行った。すなわち朗読とピアノの即興演奏では、「呼子と口笛」「心の姿の研究」「詩六章」を取り上げ、声楽演奏では、高田三郎作曲「啄木歌集」より8曲、越谷達之介作曲「啄木によせて歌える」より4曲、清瀬保二作曲「啄木歌集」より5曲、そして岩手大学の作曲担当の教授であった林芳輝の作品「啄木三題」の演奏を行ったのである。

第3回（平成7年度）は、プログラムの最初に、啄木の子どもの頃（明治20年代）に歌ったと思われる唱歌を受講生と一緒に歌う活動から始めた。選曲の中には意図的に「数え歌」「風車」という雅楽調の「保育唱歌」を加えていた<sup>2)</sup>。第3回における朗読は、詩や短歌のみならず啄木の小説「道」を取り上げている。歌曲は、啄木の詩による複数の作曲者の歌曲を比較演奏すると共に、高木東六作曲の「五つの啄木による歌曲」と清瀬保二の歌曲集「ふるさと」より5曲を演奏した。最後のまとめは、受講者全員による「ふるさと」（平井康三郎作曲）の斉唱という内容であった。

第4回（平成8年度）からは、啄木の世界に宮澤賢治が加えられ、音楽講座でも第7回まで継続して「音楽と朗読～賢治と啄木」のタイトルで取り組むことになる。第4回講座では最初と最後に受講者全員による斉唱が行われた。オープニングには啄木の「ふるさとの歌」（平井康三郎と林芳輝作曲）、エンディングには賢治の「牧歌」と「星めぐりの歌」の2曲が全員で歌われた。この回前半の「啄木・賢治の詩歌と音楽」の中では、従来の形式の朗読と演奏を行った。そして後半では、「セロ弾きのゴーシュと音楽」を取り上げ、朗読・テープ・演奏を挟みながら本作品の分析を行うという、講義と演奏を取り混ぜたいかにも公開講座らしい内容と構成であった。

第5回（平成9年度）は、第1部は「啄木歌曲集と詩の朗読」で音楽と文学の関連性に焦点を当てた内容であった。また第2部の「啄木と賢治作品の音楽創作と解釈」の中では、比較鑑賞のための譜例を資料として用意したり、賢治の書簡から音楽に関するものを抽出したりするなど、従来以上に充実した講座内容になっている。

第6回（平成10年度）は、旧制一校の内藤濯教授がフランス留学中にパリで仏訳した啄木の歌とフ

ランス人の若者が訳した詩との比較を行った。またこの回に初めて受講者による朗読をプログラムに加えた。この時は、啄木の歌曲作品の他に、岡田京子による賢治の詩の朗読とピアノによる作品を取り上げた。

第7回（平成11年度）は、全体的に賢治に傾斜した講座になった。青島広志編曲の宮澤賢治歌曲集「ポランの広場<sup>9)</sup>」から全曲の9曲取り上げ、受講生に歌詞を朗読させてから今関が演奏した。「ざしき童子のはなし」では受講生の朗読に中地がピアノで即興演奏を加えている。教官が音楽を担当してはいるが、これは物語による音楽づくりの一手法である。

第8回（平成12年度）は、歌曲集毎に受講生に啄木の詩を読ませてから歌の演奏を行った。また「種山が原の夜」では今関が受講者に徹底した方言指導を行った。この回は、歌・朗読・ピアノによる「よだかの星」（岡田京子作曲）の演奏で締めくくったのである。

## 2. 第1回から第8回の音楽講座の特徴

全8回にわたる音楽講座の内容を駆け足で概観した。本講座の担当者（今関・中地）が回を重ねる毎に講座内容の吟味を行いながら、内容の充実を図り、マンネリに陥らないようにとの努力を重ねた軌跡を見ることができる。

第8回までの音楽講座には、次のような特徴がみられる。

- ①一貫して朗読とピアノの即興演奏による表現を行っている。
- ②講義は作品の解釈や演奏の補助的な意味で行われることが多い。
- ③1つの詩による複数の作曲作品を収集して比較演奏を行っている。
- ④方言を尊重しながら言葉を重視した表現活動を取り上げている。
- ⑤斉唱や朗読などに積極的に受講者を参加させようとする意図が見られる。

一般的に大学の公開音楽講座や地域の音楽関係の講座では、技能の獲得をめざすものが多いが、本講座は楽器の技能習得を目的としない新しいタイプの講座であったといえる。しかしながら生涯学習の立場から講座内容を見直した時、今後、受講者がこれまで以上に主体的・意欲的に取り組める参加型の講座の在り方を探ることが必要と思われる。

## 3. 第9回音楽講座の内容決定

第9回音楽講座の内容を決定する上で配慮したことの1つは、本講座には何年も継続的に参加している受講者が多いため、できるだけこれまで行った講座内容との重複を避けることであった。そしてもう一つは、これまで以上に受講者が主役になれる講座の在り方を追究しようということであった。そこで受講者による音楽づくりの活動を構想した。しかし啄木や賢治への思いが強い受講者であっても音楽的なバックグラウンドは全員異なる。また朗読や斉唱については従来の音楽講座で体験済みの受講者もいるが、自らの手で音楽をつくる活動は受講者の誰もが未経験である。そもそも1980年代から創造的音楽学習や音楽づくりの呼称で音楽教育に導入されたこの活動は、近年、都市部を中心に教育現場でようやく定着してきているものである<sup>9)</sup>。岩手県内では教育現場においても、現在のところさほど積極的な展開は見られていない。この時期に、事前に音楽講座の内容の説明を受けずに参加する受講者を対象に、この種の活動の実践が可能か否かについては、かなりの不安を覚えたが、新しい試みに挑戦する方向に決定した。音楽づくりの活動では、相談や音の追究や実際に音楽を創るための時間等が必要である。したがって第9回は講座内容を賢治のみに絞り込み、音楽講座の題目を「宮澤賢治の詩と音楽」と決定した<sup>9)</sup>。

ところで「言葉と音楽」をテーマとする音楽づくりの配慮点については、『音楽の語るもの』の著者の一人であるJ・ペインターが次のように指摘している。

「劇の中の音楽は効果音とはまったく異なったものである。効果音は、雷鳴・馬のギャロップの音・階段の足音などをただまねるだけだが、音楽は、人を感動させ、劇作家が望む通りに感じさせる。(中略) 劇の中では音楽はあくまでも‘補助手段’にすぎないということを認める覚悟がある<sup>9)</sup>」

つまり言葉の多い長い作品を取り上げると、音楽はどうしても効果音づくりに終始してしまう恐れがある。長年、言葉と音楽が対等になる総合的な表現を追究してきた島崎は、本講座でも言葉と音楽が対等な音楽づくりが可能な詩の作品を選択する必要があると考えた。その結果、短い言葉の中にも広がりを感じる賢治作品「牧歌～種山ヶ原の夜の歌」が適当との結論に達した。前述したように、この作品は前年度の第8回(平成12年度)において、今関が方言指導した作品でもある。受講者のナレーションを生かすという意味では前年度とのつながりが生きる作品である。ところで司修は自分の長編小説『イーハトヴ幻想<sup>10)</sup>』の中で、種山ヶ原について次のように述べている。

「今は種山ヶ原を一望出来る場所に詩碑となってあるこの詩は、ドッドドドゥという音が聞こえる。またダーダーダースコダーダーという音も聞こえる。原体剣舞からのイメージと思われる『種山剣舞連』の『鶏の黒い尾を飾った頭巾をかぶり、あの音からの赤い陣羽織を着た』子どもらの踊りも見える。<sup>8)</sup>」

この司修のことばに出会った時、賢治の著名な詩「高原」を想起させられた。まさに「高原」の舞台は種山ヶ原に違いないと思えたのである。実際には、「高原」の詩に登場するのは原体剣舞ではなく、鹿踊りである。それにもかかわらず「高原」の詩で種山ヶ原をイメージさせられたのは、「高原」の中の「光る山」という言葉と種山ヶ原が重なると共に、司のこの小説に掲載されていた写真が剣舞ではなく鹿踊りであったことにも由来する。実際には「高原」の舞台が種山ヶ原だという確証は得られなかった。しかし音楽講座では、試みとしてこの二つの詩を連結した詩と音楽による表現活動を構想した。北條光陽の写真編集による『宮沢賢治イーハトーブロマン<sup>9)</sup>』中で、なだらかで魅力的な高原の写真で紹介されている北上山地南西部の種山ヶ原は、賢治の作品にたびたび登場する場所である<sup>10)</sup>。賢治にとって「生命体として宇宙との生動する交換の場なのであり、変動する風や雲や霧たちは宇宙生命の生きた言葉であり表情であった<sup>11)</sup>」といわれるこの高原は、彼の心象風景そのものだったに違いない。

本講座における音楽づくりの構想は以下のとおりである。

(表1)

(1) 「高原」の詩と音楽	* 「鹿踊り」のイメージに合う和太鼓の活用を促す。
(2) 「牧歌」(「種山ヶ原の夜」の歌) の詩と音楽～1連から6連	* 音楽づくりのために各連のキーワードを示す。
(3) 「牧歌」(「種山ヶ原の夜」の歌) の全員による斉唱	* 青島広志編曲のオリジナル楽譜による斉唱で最後のまとめとする。

## Ⅱ 第9回音楽講座「宮澤賢治の詩と音楽」の事前指導

### 1. 歌の演奏および歌唱指導

本講座の最初は、受講者全員で最後に歌う予定の「牧歌（「種山ヶ原の夜」の歌）を島崎のピアノ伴奏で今関が模範演奏を行い、続けて同曲の歌唱指導を行った。宮澤賢治作詞作曲の「牧歌」は、歌唱経験の浅い人にとっても、さほど歌うのが難しい作品ではない。しかしあえてへ長調から変口長調に転調し、またへ長調に戻る青島広志編曲の楽譜による歌唱指導を行った。ピアノ伴奏も青島編曲のオリジナル伴奏譜を使って本格的な構成の歌唱を体験することで、シンプルだが味わい深い賢治の音楽世界に浸らせたいと考えたのである。たった3音による曲とは思えないほどの表現力に溢れた賢治のこの曲は、転調によって音域が広がってもわずか6音のみの名曲である。かつて伝承音楽のわらべうた以外に、3音のみのこれほど豊かな歌曲に出会ったことはない。林光が「賢治の歌曲の作曲は、素養の網の目を食い破ってこぼれ落ちるものだった<sup>12)</sup>」と言い得て妙な表現をしているが、作曲技能を身に付けた者が陥りやすい目先の派手さとは無縁な素朴さが光る音楽作品なのである。

音楽講座の受講者は平均年齢59.5歳という高い年齢にもかかわらず、この曲の歌唱では楽曲の力に促されて伸び伸びと歌う意欲的な姿に出会うことができた。

### 2. 音楽づくりのためのイメージづくり

音楽づくりのためのイメージづくりについては、受講者に次の4つの方法を提示した。

- 詩の朗読と弦楽器ライアーによる演奏（即興を含む）の鑑賞
- 岩手大学の学生が「保育音楽」の授業で行った音楽づくりの映像鑑賞
- 詩による音楽づくりの方法の提示
- 奏法がそれほど難しくない珍しい楽器や音具の紹介

以下、この4点について講座の流れにそって述べていきたい。

#### (1) 詩の朗読と弦楽器ライアーによる演奏

まずは今関による方言を重視した「牧歌」の詩の朗読に島崎が弦楽器ライアーで音楽や効果音を入れた。ところでこのライアーという楽器について書いてある文献は僅少であり、日本語の文献については皆無に等しい<sup>13)</sup>。

ライアー (Leier)とはドイツ語の豎琴を意味するが、ギリシア時代の同義の弦楽器リラとは違う楽器で、シュタイナー教育や芸術分野で活躍している新しい楽器である。今から約75年前に、ルドルフ・シュタイナーが創造した動きの芸術すなわちオイリュトミーの音楽担当だったエドムント・ブラハトと彫刻家のローター・ゲルトナーが、生前にシュタイナーが要求していた楽器のイメージを基にして、スイス郊外において共同で開発した楽器である。

日本では、2001年に公開され反響を呼ぶと同時に様々な賞を受賞した宮崎駿監督のアニメ映画『千と千尋の神隠し』のテーマ曲「いつも何度でも」（覚和歌子作詞、木村弓作曲）によって、突然センセーショナルに注目され始めた楽器である。しかし本来この楽器は、主にシュタイナーの治療教育やシュタイナー学校の授業で使われているものである。音色は天上の響きといえるほど繊細で神秘的であり、音量は決して大きくなく、むしろ小さなささやきに似た地味な楽器である。現在、シュタイナー教育の現場以外にライアーでコンサート活動を行っているライアー奏者の数は、世界的にも決して多くない。またこの楽器の演奏者は基本的にシュタイナーの哲学に触れた者たちである。シュタイナ

一思想から離れて純粹に歌の伴奏楽器としてライアーを活用している木村弓の活動は、むしろ極めて珍しいケースといえる<sup>14)</sup>。島崎は、1986年に「東京ライアーアンサンブル」が発足した時からメンバーとして演奏活動を行ってきた<sup>15)</sup>。そこで第9回の音楽講座では、朗読とピアノのコラボレーションではなく、ライアーの演奏と即興による効果音を加えた詩の朗読を試みた。なお今関はレインスティックを振って雨の表現をしながら朗読を行った。

### <朗読とライアーによる「牧歌」の表現>

☆光の曲～ Volkel dillman作「厳かに光り輝く Solen strålar ner」<sup>16)</sup> (譜例1)

- ①種山ヶ原の雲の中で刈った草は  
どごさが置いたが忘れて 雨あふる
- ②種山ヶ原のせ高のすすぎあざみ  
刈ってで置きわすれで雨あふる 雨あふる
- ③種山ヶ原の霧の中で刈った草さ  
わすれ草も入ったが忘れて 雨あふる
- ④種山ヶ原の置きわすれの草のたばは  
どごがの長嶺でぬれでる ぬれでる
- ⑤種山ヶ原の長嶺さ置いた草は  
雲に持ってがれで無くなる 無くなる
- ⑥種山ヶ原の長嶺の上の雲を  
ほっかげで見れば無くなる 無くなる

「牧歌」(譜例2)を1 oct.下で演奏(1コーラス)してから雨の表現へ～B-F-Es-Desの音型をゆっくり繰り返す。

↓

B-F-Es-Desの音型を次第にテンポアップ

↓

弦擦りと楽器の裏を叩く奏法で激しい雨の表現～次第に静まる。

↓

「牧歌」の旋律奏(高音前半のみ)

↓

自由な雲の表現～無調的な音を音色を先行させてランダムに美しく弾く。

↓

グリッサンドで高音部の上行を繰り返し雲の上昇を表現する。

\*朗読は、最後の「無くなる」をdiminuendoで繰り返し、最後にエネジーチャイムを一打する。

☆光の曲～ Volkel dillman作「厳かに光り輝く Solen strålar ner」

### (2)岩手大学の学生による音楽づくりの映像鑑賞

音楽づくり初挑戦の受講者が、言語刺激による音楽づくりについての具体的なイメージをもつことができるように、「保育音楽」の授業の中で学生が取り組んだ岩手の民話による音楽づくりの映像鑑賞を行った。学生が自ら作品を選択して音楽づくりに挑戦した民話は、「狐の尻尾」、「こぶとり爺さん」、「火男の話」の三つである。

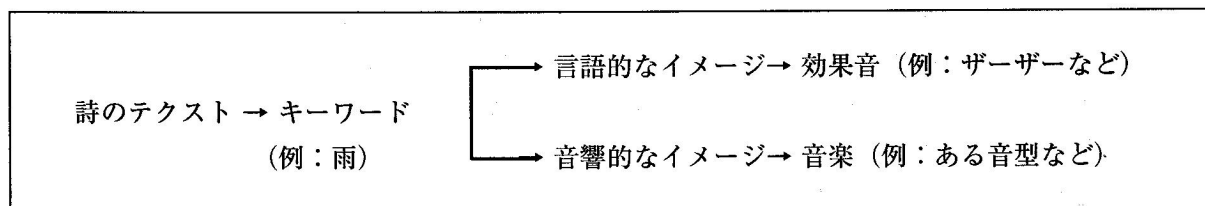
いずれもナレーター(1～3人)と音楽担当数名による7・8人のグループ編成で、効果音と創作した短い音楽が言葉とともに全体の話を進捗させていくという構成である。言葉と音楽が対等な関係を形づくりながら物語が展開する方向での音楽づくりをめざし、言葉と音楽が重なる部分、言葉や音楽だけの部分などの構成についても学生同士で相談しながら工夫を重ねた音楽づくりであった。またほとんど音楽科以外の学生による活動であったため公開講座の受講者にとっても身近な参考映像になったと思われる。

**(3)詩による音楽づくりの方法の提示**

音楽づくりでは、言葉も一種の音楽と考える。したがって表現として朗読される詩は、その意味性だけでなく、言葉として本来もっている響きと実際に流れる音との調和が最も重視されるべき観点にもなる。

受講者には、言葉と音楽の関係を簡単に板書しながら説明したのだが、ここではキーワードを抽出して、そのキーワードのイメージを核にした音楽づくりを提案した。キーワードの言語的なイメージは、具体的な効果音を誘導する。一方、キーワードがもつ音響的なイメージは抽象化された音楽の創造につながると考えられるからである。

(表2)



言語刺激による音楽づくりは、次のAとBの表現によって構成されるものである<sup>17)</sup>。

A：言葉または音楽だけの表現

B：言葉と音楽が重なる表現

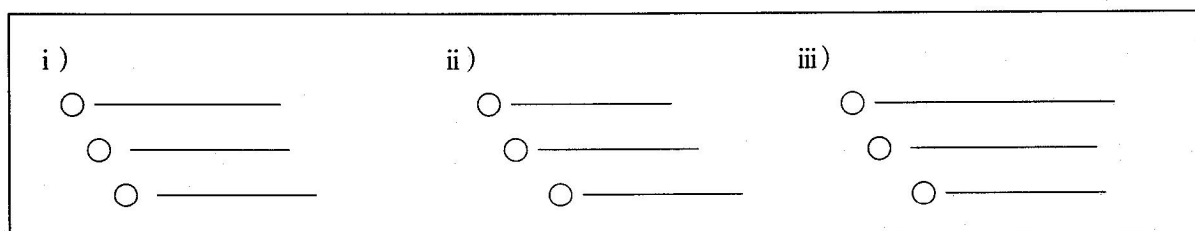
このように言葉や音楽が独立して表現されるAと、この両者が重なって表現されるBのような構成が考えられるわけだが、Aの場合は詩を読む前後に音・音楽を表現して詩と音楽の両者を際立たせることができる。Bの場合は詩のナレーションに音・音楽をかぶせるため詩と音楽は溶け合いやすい反面、詩の言葉が聴き取りにくくなるという隘路もある。

本講座での音楽づくりでは、音楽づくりの事前指導の中で比較的初心者が取り組みやすいAの表現方法を勧めた。しかし実際には後述するように、受講者たちによって、「高原」はB、「牧歌」は主にAの表現で作品化されるという興味深い結果を得た。

さて音楽づくりを行うにあたって、第一にグループ毎の話し合いで明確にしておかなくてはならない次の3点を確認した。

- ①誰がどんな音・音楽をどのような順序で入れるのか
- ②始め方と終わりをどのように工夫するか
- ③音はどのように重ねるのか

特に③の音の重ね方については、極めて多様な方法がある<sup>18)</sup>。しかし初心者には最もわかりやすい次の三つの重ね方を板書して視覚的に把握させるよう試みた。



**(4)珍しい楽器や音具の紹介と役割分担等**

音楽づくりに先だって、従来の木琴や鉄琴などの教育楽器の他に、以下のような小物の民族楽器や音具類を紹介した。

- ①竹琴（ヴェトナム）：卓上木琴ともいえる小型の竹製木琴である。小型ながらもヴェトナム音楽の音階で並んでおり、竹製のマレットを木琴上で滑らせてグリッサンドで音を出すだけでもかなりの音響効果を上げることができる。
- ②クラッパー（ヴェトナム）：持ち手の部分を掴むと、二枚の薄い竹片がパンパンと打ち合わさり大きく鳴り響く。
- ③モーコック（ヴェトナムやタイ）：蛙の形をした木魚で、叩く奏法以外にも背中部分のギザギザの凹凸を擦ることでグイロとして活用できる。
- ④ゴピチャンド（インド）：インドの民俗芸能で使われる1弦の楽器で、円錐型の胴に付いている竹の握り加減で音程が変化する。誰もが演奏可能な楽しめる楽器である。
- ⑤バリンビン（フィリピン）：先が二つに分かれている竹製の楽器で、片手で筒の下を持ち、もう一方の手の平に打ち付けて、ビーンビーンと鳴る響きを楽しむ楽器である。
- ⑥鳴子や風鈴：竹製の鳴子や様々なタイプの風鈴は音色が豊かで音楽づくりに有用である。ガラス・パイプ・竹・缶などをバーに取り付けて創ることも可能な音具である。

この他にも日本の打楽器（大太鼓、締太鼓、当たり鉦）等多数の楽器や音具を紹介した。

音楽講座の受講者は全員で15名（この内、学内参加者2名）であった。2名のナレーター希望者は、「高原」と「牧歌」の2編の詩の朗読箇所を分担して練習を行い、残りの13名は4・5人ずつに分かれて、「高原」、「牧歌前半（1～3連）」、「牧歌後半（4～6連）」の三つのグループによる音楽づくりの活動が行われた。

ところで音楽づくりの取り組みに際して受講者の意欲を示す次の二つの出来事が、極めて印象的であった。

その1つは、楽器紹介の最中に、落ち着かない様子の女性にどうしたのかを尋ねたところ、「早く活動がしたい」という答えが返ってきて驚かされたことである。

その2つめは、活動内容の説明の後、20分間の休憩を予定していたが、受講者のほとんどが休憩時間中に既に様々な楽器に触れ、音の探求をし始めたことである。つまり休憩なしで音楽づくりの活動に突入した人が多かったということである。

音楽づくりの活動開始直後のこれらの姿を見て、講座内容の計画中に抱いたこの試みに対する不安を払拭することができた。表現者である受講生が主体的に活動に取り組んでくれば、音楽づくりは成立するからである。活動中に多少の楽器の選択で悩む様子なども見られたが、最終的には、次項に示すような作品が誕生したのである。

### Ⅲ 受講者による音楽づくり～「高原」と「牧歌」による作品～

音楽づくりの活動時間は約45分間であった。話し合いと活動終了後にナレーションを加えながら各グループの音楽を聴き合い、必要なアドバイスと表現の推敲を行ってから本番としたが、全体的には、(表1)に示した流れの表現を実現することができた。作品の流れに沿って受講生が創りだした音楽の概要を述べる。

なお詩の言葉に付したアンダーラインは、活動に先立ち受講者と確認し合った音楽づくりのためのキーワードである。作品中にキーワードが必ずしも直接的に表現されているわけではないが、創られた作品からキーワードが受講者の言語的・音響的イメージづくりに機能していることが把握できる。



## (1) 「高原」の詩と音楽

これは詩に音・音楽を重ねるBの方法による音楽づくりである。ここでは詩の中、G1からG3はグループの1から3を表している。なおN1・2は2人のナレーターである。

<p>「高原」 &lt;N1&gt;</p> <p>海だべがど おや おもったれば</p> <p>やっぱり<u>光る山</u>だたぢゃい</p> <p>ホウ</p> <p>髪毛 風吹けば</p> <p><u>鹿踊り</u>だぢゃい</p> <p><u>鹿踊り</u>だぢゃい</p>	<p>♪&lt;G1&gt;ナレーターがタイトルを言うと同時にグロッケンが上行のグリッサンドを繰り返す。レイNSTEICKが加わり、「高原の風」を表現する。</p> <p>♪シンバルとウインドチャイムがきらびやかに「光る山」の様子を表現する。</p> <p>♪グロッケンと鳴子が「高原の風」を表す。</p> <p>♪バリンビン（2拍）の合図</p> <p>♪「鹿踊り」イメージで2人が和太鼓の両面打ちと当たり鉦が、(譜例3)のリズム形を2回打つ。</p> <p>♪2回目の「鹿踊り」で、同じリズム形を和太鼓と当たり鉦で7回繰り返す、この詩の終わりを感ぜさせながら次の「牧歌」につなげる。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## (2) 「牧歌」(「種山が原の夜」の歌)

キーワードを手がかりとした「牧歌」の1連から6連の音楽づくりである。主に言葉と音楽が独立して表現されるAの方法による音楽づくりであり、ここでは詩と音楽をバランス良く交互に組み合わせる方法を取っている。

<p>「牧歌」 &lt;N2&gt;</p> <p>①種山ヶ原の雲の中で刈った草は</p> <p>どごさが置いだが忘れた 雨あふる</p>	<p>(音なし)</p>
<p>♪&lt;G2&gt;最初にレイNSTEICKがサワサワと流れ、次いで木琴が4音の「雨」の音型(譜例4①)を何度も繰り返す。これにヴェトナムの竹琴の音が下の音から上の音へと上行音型を繰り返す、木製鳴子がカラカラと草のイメージを表現する。バリンビンが木琴の1拍目に静かに重なる。静けさの中で音が止む。</p>	
<p>②種山ヶ原のせ高の<u>すすぎ芒</u></p> <p>刈ってで置きわすれで<u>雨</u>あふる 雨あふる</p>	<p>♪鳴子がカラカラと鳴り続ける。</p>
<p>♪レイNSTEICKがサワサワと響き、次いで木琴が①とは違う4音の「雨」の音型(譜例4②)を繰り返す。これに「すすぎ芒」をイメージさせるドイツ製の手回しオルゴールの繊細な音とクラッパーのリズムが重なる。雨の音型を表現していた木琴が少々テンポを上げ、最後にグリッサンドで一気に上行すると音が止む。</p>	
<p>③種山ヶ原の霧の中で刈った草さ</p> <p><u>わすれ草</u>も入ったが忘れた 雨あふる</p>	<p>♪鳴子がカラカラと鳴り続ける。</p>

♪ 鳴子がカラカラと鳴り続ける中で、ティンパニーと銅鑼（ゴング）が深く静かに鳴り響き、種山ヶ原の「霧」の風景を表現する。木琴が再度音程を変えて（譜例4③）を繰り返す、重ねてヴェトナムの竹琴の音が下から上の音へと上行音型を繰り返す。レインスティックとバリンピンの音が鳴ると同時に、グロッケンが上下行のグリッサンドを繰り返す。ゴングをこする音が鳴ったならばグロッケンが上行して音が止む。

④種山ヶ原の置きわすれの草のたばは < N 2 >

どごがの長嶺でぬれでる ぬれでる

\*ゴングが静かに鳴る中で、< G 2 >から< G 3 >にメンバーが入れ替わる。

♪ 鈴を細かく振る音が「高原の風」を、静かなバス鉄琴の音が「長嶺」を感じさせる。ウインドチャイムとカラカラと鳴る手づくりの竹楽器とビブラスラップの音が「雨」と「草のたば」のぬれた感じを醸しだし、カバサが鳴ると直ぐにバス鉄琴がゆっくりと最後の音を奏でて次につなげる。

⑤種山ヶ原の長嶺さ置いだ草は < N 1 > (音なし)

雲に持ってがれで無くなる 無くなる

♪ 風を感じさせる鈴の細かい響きが鳴る中で、バス鉄琴がオクターブでG音（譜例5）をゆったりと奏でる。この二つの音にかぶせるように鉄琴が即興的な自由な動きで「雲」を表現する。手づくり竹楽器が時々和太鼓に当たって不思議な音を立てながらカラカラと響き、最後は鉄琴の消えていく音と鈴を振る音だけが余韻を残す。

⑥種山ヶ原の長嶺の上の雲を < N 1 > (音なし)

ぼっかげで見れば無くなる 無くなる

♪ ビブラスラップとウインドチャイムが鳴り響き、ウッドブロックのホールに入れたスティックでカラカラ鳴る音が寂寞とした高原の様子を感じさせる中、グロッケンがクロマティックな上行音型を次第に早くして雲を追いかけ、最後に高音のG音とウインドチャイムで雲が消えていく様子を表現する。

(3)「牧歌（「種山が原の夜」の歌）」による全員の斉唱

「牧歌」の最後の詩と音楽が消えると受講者全員が教室前方のグランドピアノ前に並んで、本講座の最初に練習した「牧歌」（青島広志編曲のオリジナル楽譜）を、全員で1番から6番まで通して歌ってまとめとした。

様々な音と向き合い、かつ音を探求した音楽づくりの後の歌声は、最初の歌声よりも一層伸びやかに響いて聴こえたこと、そして歌い終わった受講者が互いに拍手を送り合ったことを付言しておきたい。

音楽づくりはプロセス重視の活動であり、生まれた作品の巧拙を厳しく問うことを重視しない。しかし全般的に約45分という時間的制約の中での初めての音楽づくりとしては、一定のまとまりのある作品を創り上げることができたといえるであろう。これらの活動のプロセスで受講者が学んだことについては、次項のアンケートに垣間見ることができる。

(譜例 1)

Solen strålar ner  
 蔽かに光り輝く

Volkel dillman作曲  
 島崎 篤子編曲

Three staves of musical notation in 3/4 time. The first staff shows a melody with eighth notes and quarter notes. The second and third staves show accompaniment with chords and moving lines.

\*デュオの曲を独奏用に編曲したものである。

(譜例 2)

牧歌「種山ヶ原の夜」の歌

宮澤賢治作詞作曲

Two staves of musical notation in 6/8 time. The first staff contains the melody with lyrics underneath. The second staff shows a rhythmic accompaniment.

たね やまが はらの くもの ながで かつた くさ  
 は どこ さ が おいだ か わす れだ あ め あ ふ る

(譜例 3)

Three staves of musical notation for Taiko drums. The top staff is labeled '大太鼓1' and has 'x' marks for '杵打ち' (shimuchi). The middle staff is '大太鼓2' and the bottom is '当たり鉦' (atari shime). The notation shows rhythmic patterns with stems and beams.

(譜例 4)

One staff of musical notation for Koto in 4/4 time. The notation includes circled numbers ①, ②, and ③ above the staff, indicating specific points of interest.

(譜例 5)

One staff of musical notation for Bass Koto in 3/4 time. The notation shows a simple melodic line with quarter notes.

## IV 受講者の反応と今後の課題

## 1. アンケートを読む

## (1) アンケートの回答

受講後のアンケートは、①「牧歌」を歌った感想、②音楽づくりの感想、③全般的な感想・意見・希望等の3項目についての自由記述で実施した。13名の受講者（学内参加者2名を除く）の生の声を挙げるが、紙副の都合上、文体は形体を常体に代えて文章も短縮してある。なおMは男性、Fは女性であり、ハイフンの右側の2桁の数字は年齢である。

- F1-42 ①難しかったが、大好きな歌なので歌ったことがうれしかった。  
 ②初めての体験で楽しかった。また賢治の別の作品にもチャレンジしてみたい。  
 ③1回目から参加しており、いつも先生方には感謝している。来年も参加したい。
- F2-51 ①歩き続け、歌い続けたいような楽しさで一杯だった。  
 ②やれば何とかミュージックになる！  
 ③先生方の独創的なアイデアについていくのみ！
- F3-51 ①シンプルだけど少し難しかった。歌うことのない毎日なので、気持ちがよかった。  
 ②様々な楽器にふれることができるととても楽しい時間だった。みんなで相談しながら創っていく作業はとてもおもしろく、また新しい体験ができた。  
 ③ありがとうございました。
- F4-53 ①「牧歌」は何て賢治らしい歌かと感動した。ぜひ多くの人に覚えてもらいたい。  
 ②不安が先に立ったが発表してほっとした。ビデオを見せてもらいたい。  
 ③今後もあまり知られていない賢治の曲に触れることができたら良い。
- F5-57 ①アルトなので高音はきつかったが、日頃高音を出すことがないので気持ちよかった。賢治の「種山ヶ原の夜」は好きな詩の一つで、このように歌や詩を満喫できて楽しかった。  
 ②すごくすごく楽しくかった。今まで音楽は聞くことのみで受け身ばかりだった。このように自分で音を創り出すことができて幸せだった。  
 ③ライアーの楽器演奏と今関先生の詩の朗読がとても素敵だった。
- F6-68 ①音譜は読めないし音感も悪いので歌は不得手。もっと歌えるように教えて欲しい。  
 ②音楽づくりに驚いて帰った方もいるようだ。年配男性も楽しめるような内容に。  
 ③音楽室のドアの音を直してはどうか。
- F7-70 ①大変良い歌を覚えた。  
 ②賢治の詩を十分に理解していないため、たくさんの楽器がありながら表現しきれず残念だったが、美しい音楽になったと思う。  
 ③啄木と賢治の詩と歌と曲について深めたいし、先生方の実演も聞きたい。
- M1-52 ①素朴な歌で親しみを感じた。  
 ②公開講座の人たちとこの機会に触れあうことができ、また協力してつくることや演奏ができて感動した。  
 ③すばらしい先生方に会えてとても良かった。
- M2-57 ①心が晴れた。  
 ②初めての体験で思ったよりも楽しかった。  
 ③やれば楽しいハーモニーが出来るようだ。

- M3-66 ①「牧歌」を歌うことで賢治の世界を感じ、喜んで歌うことができた。  
 ②音を入れる作業はどうなるのかと心配だった。  
 ③音楽は楽しい。自分のために至福の時を得て「賢治の世界」に触れる機会に感謝。
- M4-68 ①良い歌を知ってうれしい。賢治の作詞作曲なのでぜひ自分でマスターしたい。  
 ②楽器に自信がなくてナレーターを引き受けたが、自分より年輩の方々がセンスがあり驚かされた。  
 ③2度目の受講だが、素晴らしい内容で時間のたつのも忘れてしまった。
- M5-69 ①ゆっくり歌いたい声が続かなくて残念。でも楽しかった。高音はよく出ないが、頭がすーっとする感じでよかった。皆さんは良く歌うなあ・・・。  
 ②いろんな発想があり、とてもつくる過程が楽しかった。雨の音は気が付くと20秒ずつで終わってしまっていた。  
 ③よくできるできないではなくて、とにかくやってみることが大切なのだ。いろいろな動作や思考が出来て楽しかった。
- M6-71 ①歌はなれると高原の爽やかな空気に乗るようで気持ちもすがすがしくなった。  
 ②初めはどうなるかと思ったが、それぞれがセンスを生かしハーモニーが良かった。  
 ③受け身ではなく体験しながらの学習で楽しく学ぶことが出来る。小学校時代の学芸会を思い出して楽しかった。

## (2)各項目に対する考察

### ①「牧歌」を歌った感想

歌を通して「牧歌」で描かれている賢治の世界に接近することで、作品自身の力が一層感動を喚起しているようである。また歌うことに縁遠くなっている人が歌う心地よさを発見している様子もわかる。一方、F6-68の感想にあるように歌に対する苦手意識が先行して、歌うこと自体に素直に接近できない人もいたようである。しかし「もっと歌えるように教えて欲しい」とは歌いたい心の表れであり、音楽講座が受けもつべき課題である。

### ②音楽づくりの感想

初めて音楽づくりの体験を歓迎してくれた感想が多く、企画した側にとってもありがたい反応であった。しかし初体験のために実際に音楽が出来上がるまではF4-53・F6-68・M3-66のように不安を抱いた人もいたようである。F6-68が指摘した途中で席を立った人は啄木関係の会に参加されるためという説明を受けたが、音楽づくりの活動開始と同時にタイミング良く席を立たれたため真偽のほどはわからない。実際、自分が主役になる音楽づくりの活動はやってみるまでは経験がないだけに不安を感じる人がいても当然である。またM5-69のように音楽づくりの「過程」そのものを楽しんでくれる人は、講師側の意図が届いたといえよう。音楽づくりを行う場合には、活動への導入方法を綿密に工夫することが肝要であることを再確認させられた。

### ③全般的な感想・意見・希望等

全般的な感想から本講座の受講者が、学ぶことに対して極めて意欲的な人々であることがわかる。また参加型の講座の在り方が支持されたと考えても良いであろう。その一方でF7-70のように従来型の生演奏の鑑賞を期待している人もいることから、音楽づくりを核にしつつも講義や演奏等をバランス良く配する講座をめざす必要がある。また音楽づくりの活動は多様であり、本講座において実践可能なタイプの音楽づくりを模索することも必要である。

## 2. 今後の課題～結びに代えて

第9回の音楽講座によって、音楽づくりの活動は、大人であっても学びに対する楽しさと活動意欲を喚起する力があることを知る契機となった。このことは今後の音楽講座の主な方向性をも示唆してくれるものである。受講者の意識はアンケートに見たが、講師側の主な反省や課題としては、次のような点が明確になった。

(1)宮澤賢治の全般的な作品研究が必要不可欠であること。

公開講座の講師として参加するには、賢治の音楽的側面だけではなく、賢治の人となりや全般的な作品研究が要求される。責任ある内容を提供するためには、今後、賢治や啄木についての不断の研究なくして音楽講座の継続的な担当は難しいということを痛感させられた。

(2)受講者への説明や指導助言には配慮すべき点が多いこと。

それぞれの受講者にはそれまでの人生の歴史があり、自己に対するプライドも高い。音楽づくりは音楽の技能よりも発想を重視する活動であるが、そのことを活動の事前指導で徹底しなければ、子どもや学生以上に不必要に技能の壁を感じる人も出てくる可能性がある。音楽づくりがめざしている方向をより分かりやすく説明すると共に、話し合いや主体的な活動の時間を十分に保障するなどの配慮が必要である。

(3)講座全体のタイトルに対する賢治の位置づけが難しいこと。

本講座の全体のタイトルは公開講座「石川啄木の世界」である。宮澤賢治生誕100年の平成8年から賢治の世界も対象に加えたとはいえ、この講座名のままで啄木と賢治の両者を対象にしていくには少々無理がある。今後も継続的に賢治を対象に加えていくのであれば、講座名を「啄木と賢治の世界」とする方が音楽講座としても取り組みやすい。

9年間の公開講座「石川啄木の世界」における音楽講座を振り返り、参加型の公開講座が大人の＜主体的な学びを保障する＞という立場から重視されるべきとの確信が得られた。また公開講座を担当するには講師自らの研究の深化が要求されることも痛感させられた。そして何よりも音楽づくりの活動では、誰もが年齢や音楽経験を問わず創造的な表現者になれることを確認できたのは成果であった。まさに賢治の言葉「誰人もみな芸術家たる感受をなせ／個性の優れる方向に於いて各々止むなき表現をなせ／しかもめいめいそのときどきの芸術家である<sup>19)</sup>」に実感を得た思いである。

ところで生涯学習に対する大学の対応としては、公開講座だけではなく、大学の施設の解放、社会人入学、科目等履修生、単位互換制度など様々な事業が行われている。また近年、夜間学部や夜間大学院の設置による正規のコースへの社会人受け入れの必要性が叫ばれるようになってきている。こうした動向の中で、21世紀に向けて大学の公開講座への期待も一層高まってくるものと思われる。

瀬沼克彰によると、1970年代から欧米で生涯学習が急速に進展したのは、生涯学習の受け皿のほとんどが大学であり、各種講座による学習で習得したライセンスや講座の単位の実績が昇進、昇格、昇給に反映されることが大きな理由だという<sup>20)</sup>。日本の国立大学では、科目等履修生や免許法認定公開講座への参加で単位が認定され、単位認定のない一般向けの公開講座であっても岩手大学のように修了証を発行しているところが多い。修了証がもつ意味が大きくなると受講生の意欲も高まるに違いない。また私立大学のみならず国立大学でも経営手腕が問われる時代が迫ってきており、優れた公開講座の在り方も追究しなければならぬ重要な課題の一つになるであろう。

## 【注および参考文献】

- 1) 本稿では、便宜上、公開講座「石川啄木の世界」の音楽関係の講座を音楽講座と呼称する。
- 2) 明治15年に日本で最初の唱歌集『小学唱歌集』初編が出版され、16・17年と続いて第2編、第3編が出版された。「保育唱歌」は、主に『小学唱歌集』出版以前に歌われていたが、啄木が生きた明治20年代はこれらが重複して歌われていた時期でもあった。
- 3) 青島広志編曲、宮澤賢治歌曲集『ボランの広場』(株)ショパン、1997年出版。
- 4) 創造的音楽学習は、Creative Music Learning またはCreative Music Makingの訳語であり1982年に邦訳された『音楽の語るもの』(山本文茂他訳、原題 *Sound and Silence*) 以来、日本の音楽教育に影響を与えた教育思想及び方法でもある。学習指導要領では「音楽をつくって表現できるようにする」としているが、島崎の拙著『音楽づくりで楽しもう!』(日本書籍、1993年)を初めとして、近年、「音楽づくり」の用語で定着してきている。
- 5) 平成13年4月に配布された音楽講座の予定講義題目は「啄木の音楽、賢治の音楽」としていたが、検討の結果、後日変更したものである。
- 6) J・ペインター、P・アストン著、山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり訳『音楽の語るもの』音楽之友社、1982年、70頁。
- 7) 司修「イーハトヴ幻想」(『へるめす』岩波書店、1996年7月号)は、この雑誌での発表の後、同年、岩波書店から単稿本として刊行された。
- 8) 前掲7)の書、33頁。
- 9) 天沢退二郎・萩原昌好監修、北條光陽写真『宮澤賢治 イーハトヴロマン』くもん出版、1996年、63頁。
- 10) 本講座で取り上げた6連の詩「種山ヶ原」は、劇「種山ヶ原の夜」の中に登場する。この他にも物語の「種山ヶ原」や文語体の詩や口語体の詩「種山と種山ヶ原」や「種山ヶ原」等の作品がある。また物語「さるのこしかけ」の会話の中にも「種山ヶ原」は登場する。
- 11) 原子朗編著『宮澤賢治語彙辞典』東京書籍、1989年、445頁。
- 12) 宮澤賢治・林光・吉増剛造著『賢治の音楽室』小学館、2000年、7頁。
- 13) ライアーに触れている日本語文献は、子安美知子著『魂の発見』(河出文庫、1998年、19-46頁)と吉良創著『シュタイナー幼児教育』(学研、2001年、91-105頁)の2冊である。
- 14) ライアーやシュタイナー教育についての記述は本稿の目的ではないため、これらについての詳述は別の機会に譲りたい。
- 15) 「ライアーの会」は1986年に発足以来、地道に演奏活動を続け、2000年には「東京ライアーアンサンブル」と改称。2001年の夏にはドイツにおいても2回のコンサートを行っている。
- 16) この作品の作曲家Volkel dillmanは、スウェーデンの作曲家である。
- 17) 詩と音楽の関係については、4)の拙著『音楽づくりで楽しもう!』(104-127頁)を参照されたい。
- 18) 島崎篤子「音楽づくりの学習活動」(音楽教育研究協会編『最新音楽科教育法』、2000年、123頁)には、音の重ね方として18のパターンを提示している。
- 19) 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」天沢退二郎編『宮澤賢治万華鏡』新潮文庫、2001年、172頁。
- 20) 瀬沼克彰著『日本型生涯学習の特徴と振興策』学文社、2001年、39頁。